

物理学から美の研究へ

柔軟な発想を受け入れる阪大の土壌

●OB訪問

●大阪市立東洋陶磁美術館 館長
出川哲朗 — Testurou Degawa

基礎工学部の自由闊達な雰囲気の中で、量子物理や統計力学を学んだ後、新設間もない大阪大学文学部美学科へと進んだ出川哲朗さん。物理学と芸術学という二つの世界で出会ったさまざまな恩師の教えが、今の自分のなかで息づいていると語る。



●出川哲朗(でがわ てつろう)氏
1978年大阪大学基礎工学部卒業後、文学部に学士入学、文学研究科修士課程修了(美学・芸術学専攻)、西宮市大谷記念美術館学芸員を経て大阪市立東洋陶磁美術館学芸員。2008年より館長を務める。専門は中国陶磁史。主著は『明末清初の民窯』(共著)、『アジア陶芸史』(共著)。

T. Degawa

回り道もあつたけれど、無駄なことなんてひとつもなかった。いい出会いばかりだった。

●夢中になれた基礎工時代

大阪のリバーサイド、中之島。ここに日本、韓国、中国などアジアの陶磁を一堂に集め、展示する大阪市立東洋陶磁美術館がある。豊臣家ゆかりの油滴天目茶碗、鴻池家伝来の飛青磁花生という2点の国宝に加え、中国歴代の皇室専用の窯で制作された名品を楽しめる、世界的にも知られた美術館だ。館長を務める出川さんは、大阪大学の基礎工学部卒業。意外な経歴だといえるかもしれない。

「なにしろ新しい学部だったので、自由な雰囲気にあふれていました。量子力学、物性物理学など、先生方の熱の入った講義は本当に楽しかったですね。理系の学科ですが、中国哲学の発想も進んで取り入れるような懐の深さがありました」

●自然採光展示室の国宝2点の前で

ちょうどこの頃、同じ豊中キャンパスで、文学部に美学科を設立する準備が進んでいた。出川さんは授業の合間を縫って、美学、芸術学の講義を聴講しに行った。「数式を使って芸術を表そうとする『情報美学』の考え方が出てきた頃でした。物理学や数学の理論と芸術をつなぐ考え方が非常に衝撃的で、夢中になりましたね」と振り返る。

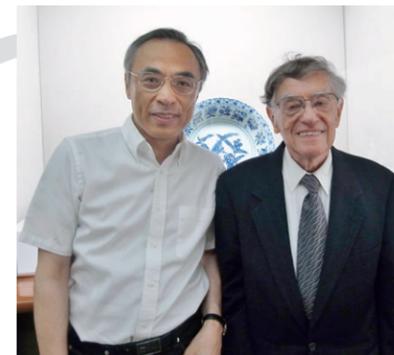
●木村重信、ドナルド・キーン先生との出会い

芸術学のなかでも、木村重信先生の抽象美術論の講義が楽しくて仕方がなかった。「木村先生は本当に博学で、どこの国のどんな時代の芸術作品にも分け隔てなく興味や関心を持ってアプローチできる方。まず現物から芸術を考える人。ダイナミックでエネルギーな考え方の持ち主です」

美学への思いにかられ、とうとう文学部への転部を思い立つ。しかし木村先生から「いったん物理学を修めてから文学部において」と言われ、基礎工学部を卒業。その後文学部美学科に学士入学し、大学院へと進んだ。美学の基礎は哲学。プラトンから始め、カント、ヘーゲル、ハイデッガーと、さまざまな思想家の美学、芸術論に触れた。量子力学に触れた時のように、多様な理論がどれも興味深く感じられたという。

出川さんにとって大学時代から今も交流が続く恩師の一人に、ドナルド・キーン氏がいる。「先生は非常勤講師として毎週、飛行機に乗って教えに来ておられたのです。日本文学論を聴講しましたが、もうとびきり楽しかったですね。どんな時もユーモアを忘れない、本当にすてきな人で、その魅力は変わりません」

キーン氏は今も時折、お気に入りの韓国陶磁を鑑賞するために東洋陶磁美術館を訪れるそうだ。



▲ドナルド・キーン先生と



●飛青磁花生(元 13-14世紀、国宝)は、照度、色温度で色彩が微妙に変化する

●美は見る人の中に現れる

修士課程を修了し、西宮市の大谷記念美術館に勤めていたころ、「東洋陶磁美術館の採用試験を受けてみては? 君にぴったりだよ」と、木村先生から声をかけられた。出川さんが学生時代から東洋の陶磁に興味を持っていることを、覚えていてくれたのだ。

新しい職場では、伊藤郁太郎館長から多くのことを教わったが、特に心に残っているのは「一流のものを見なさい。そうすれば応用が利くよ」という言葉だ。「いつも良いものに触れていると、洋の東西を問わず、価値観の違いや様式の違いを超えて、ものを見る目が養われる」。学芸員に必要なものは知識だけではなく、豊かな芸術経験なのだと言った。

「学生時代は、作品の中にある『美そのもの』を追究し、理論的に表現しようと試みていました。修士論文は、「抽象表現主義とゆらぎについて」。物理学の概念を美学に当てはめて考えるというユニークなテーマだった。

しかし、今は変わってきた。「見る人の中に美がある」という思いが強まりました。来館される方に、自分の目で見てほしいと思った気持ちを大切にしてほしいのです。美術館は、そのような『見る人の気持ち』をサポートするところ。学術的な解説を伝える準備はきちんとしなくてはなりません、そのような情報はいったん後ろに置いて、作品そのものを見てもらうための環境を整えることがとても大切だと考えています」

●ビジョンを定めつつ、柔軟に

「回り道もあつたけれど、無駄なことなんてひとつもなかった。いい出会いばかりだった」と出川さんは振り返る。基礎工学部でも、文学部でも、楽しいことばかり。どの先生も「自由に柔軟に何でもやってみろ」と背中を押してくれた。今の仕事も楽しくてしょうがない。

後輩たちにも、「ビジョンをしっかりとつことは大事だが、同時に好奇心と柔軟な発想を大切にしてほしい」と語る。「どんな道をたどっても、確かな目標があれば解決する道が見えてくる。安易に妥協しないで、柔軟な心で人生を謳歌してください」



美術館情報

●大阪市立東洋陶磁美術館
中国・韓国の陶磁の収集では世界屈指の「安宅コレクション」を所有する住友グループが大阪市に寄贈。大阪市は1982年に美術館を設立。日本陶磁やベルシャ陶磁も合わせ約4000点を収蔵。国宝2点、重要文化財13点を含む約400点の代表作が平常展、特別展を通じて紹介されている。最寄駅は、京阪中之島線「なにわ橋」地下鉄御堂筋線・京阪本線「淀屋橋」、地下鉄堺筋線・京阪本線「北浜」。
●11月末まで特別展「IMARI/伊万里 ヨーロッパの宮殿を飾った日本磁器」を開催中